

# チョムデンリクレル著『弥勒法の歴史』

—テキストと和訳—

加納和雄・中村法道

## はじめに

その著作が弥勒に帰される『現観莊嚴論』、『大乘莊嚴經論』、『中辺分別論』、『法法性分別論』、『宝性論』は、チベットにおいて古くから「弥勒五法」(byams chos lnga) と呼ばれ、唯識・中観思想を学ぶための教科書的な役割を果たしてきた。現代仏教学の視点からするとそれらすべてを同一人物の著作とみなすことは必ずしも問題がないわけではないが、インドにおいては遅くとも 11 世紀までには五法すべてを弥勒一人に帰する伝統が存在したと考えられる<sup>1</sup>。以下に挙げる、ゴク・ロデンシェーラブ (1059–1109) 著『宝性論要義』の冒頭の一節は、弥勒五法について明確に言及する最初期の用例のひとつである。

弥勒尊は、仏説の意図を顛倒なく明示なさった際、了義経という宝、不退転法輪、〔そして〕法界を唯一の方法〔すなわち一乗〕で説示し、疑いなく極清浄である一切の法門の意味を説示する<sup>2</sup>ところの、この『大乘究竟論』〔すなわち『宝性論』〕を著作することによって、大乘の教義の真実を規定なさった。〔一方で〕未了義經典の内容解説によって、卓越した法を解説するための器(基盤)をなすことは、二種の莊嚴論〔すなわち『現観莊嚴論』と『大乘莊嚴經論』〕と二種の弁別論〔すなわち『中辺分別論』と『法法性分別論』〕を説くことによってなされた。なぜなら〔同四論書は〕世俗および別なる意図<sup>3</sup>に基づいたところの勝義を規定するゆえに。<sup>4</sup>

<sup>1</sup> チベットへの五法の流伝と前伝期・後伝期の翻訳事情については Khang dkar Tshul khriims skal bzang 1984 や袴谷 1986 など参照。

<sup>2</sup> 「極清浄である一切の法門の意味を説示する」は木版本(A)の読み。写本(B)は「極清浄である〔如来蔵〕の同義語であるすべての界の意味を説示する」。写本の「すべての界」という表現が不自然なため、木版本の読みを採用した。

<sup>3</sup> 「別なる意図」(gzhan gyi bsam pa) という表現は難解であるが、上記の「大乘の教義の真実」とは別なるものを意図しているという意味で理解した。

<sup>4</sup> 『宝性論要義』、A 1b2–4; B 1b1–3 (p. 290): bcom ldan 'das byams pas bde bar gshegs pa'i bka'i dgongs pa

ここでロデンシェーラブは弥勒五法に含まれるテキストを分け、『宝性論』は了義経を解説し、『現観莊嚴論』、『大乘莊嚴經論』、『中辺分別論』、『法法性分別論』は未了義経を解説するという<sup>5</sup>。五法を同一著者に帰しながらも、その間にみられる思想的な齟齬にいち早く気づき、内容的のうえから分類を行った点は卓見といえる。ただし、未了義経の註釈とされる『現観莊嚴論』以下4作品についても決して疎かにすることはなく、ロデンシェーラブは五法すべてに一様に註釈を著し、またそのいくつかのチベット翻訳作業もしくは校閲作業に参加し、それらをチベットに導入することに成功した。ロデンシェーラブが創始したサンプネウト寺の学問伝統は後代に著しい影響を残し、その伝統において弥勒五法は、般若学や論理学などにならんで中核に位置づけられ、時代・宗派の枠組みを超えて多くの僧院で学ばれ続けた。そのためチベットにおいては弥勒五法にたいする註釈文献が多数著作され<sup>6</sup>、今日においてもその価値は変わらない。

## チョムデンリクレル著『弥勒法の歴史』について

本稿で扱う『弥勒法の歴史』(詳らかには『弥勒に関連する教えが生じたあり方』、*Byams pa dang 'brel ba'i chos kyi byung tshul*)は、チベット仏教後伝期屈指の学者にして歴史家でもあるチョムデンリクレル(1227-1305)の手によるものであり<sup>7</sup>、弥勒五法が

---

phyin ci ma log par gsal bar mdzad pa na | nges pa'i don gyi mdo sde rin po che | phyir mi ldog pa'i chos kyi 'khor lo | chos kyi dbyings tshul gcig tu ston pa | shin tu mnam par dag pa gdon mi za ba'i chos kyi mam grangs (A inserts khams) thams cad kyi don rab tu ston pa | theg pa chen po rgyud bla ma'i bstan bcos (B: chos) 'di mdzad pas | theg pa chen po'i don gyi de kho na mam par gzhas pa yin no || drang ba'i don gyi mdo sde'i don mam par bshad pas yang dag phul gyi chos bshad pa'i snod du byed pa ni | rgyan gnyis dang mam 'byed mam pa gnyis bshad pas byas (A: bya) ste | kun rdzob dang gzhan gyi bsam pa la ltos pa'i don dam pa mam par gzhas pa'i phyir ro ||

<sup>5</sup> チベット仏教において通常『般若経』は了義経と理解されているので、その註釈である『現観莊嚴論』を未了義経の解説書とするのは、いささか不自然に思われる。この点は後にサンプ寺のロドゥーツンメ(14世紀)の批判を受けることになる。Kano 2006 参照。ロデンシェーラブ著『究竟論要義』、『莊嚴經要義』、『中辺分別論要義』については加納が、また『現観莊嚴論要義』については中村がそれぞれ校訂と訳注研究を準備している。

<sup>6</sup> 特に『現観莊嚴論』は般若学の教科書でもあるためその註釈の数は膨大である。『宝性論』のチベット撰述註釈文献の一覧リストについては Kano 2006 および Burchardi 2006 を参照。

<sup>7</sup> チョムデンリクレルはナルタン寺の写本大蔵経の建立に貢献した人物として著名である。自著の奥書では bCom ldan ral gri という名がしばしば確認されるが、後代には bCom ldan rig pa'i ral gri の名で呼ばれることが多く、それを略した bCom ldan rig ral のという呼称で広く知られているため、本稿ではこの呼び方を用いた。また、彼の出家名は Chos kyi rgyal mtshan/Dar ma rgyal mtshan であり、彼の伝記や『ロントウン小作品集』(413.2-414.2)所収のリクレルへの讃頌などに確認できる(Schaeffer and van der Kuijp 2009: 1)。彼の伝記と著作については『カダム全集目録』第2輯 74-102 頁に詳しく、さらに自身の手になる著作目録(『リクレル著作目録』)が現存するが、それらについては稿を改めて論じたい。

大蔵経目録を含む彼の仏教史『仏教流伝・莊嚴陽光』(*bsTan pa rgyas pa rgyan gyi nyi 'od*)は『カダム

インドからチベットに伝承された歴史について綴る小部の作品である。チョムデンリクレルの著作は久しく散逸されたと思われてきたが、2007年に出版された『カダム全集』第2輯には彼の著作65点が収録され、『弥勒法の歴史』もその中に写本影印版として収められている<sup>8</sup>。

同写本はウメ字体で記され、都合6葉からなり、各葉は5行からなる<sup>9</sup>。表題頁上部にはPhyi La 501という記号がみられる。これはデブン寺十六羅漢堂所蔵の写本にみられる特有の記号で、Phyi「外」はデブン寺外部から持ち込まれた写本を意味する。Laはその写本が「目録関連、道次第、ロジョン」のジャンルに大分されることを示すが、当写本は弥勒五法の伝承について綴るものであるためこの分類は妥当とはいえない。末尾の数字501は整理番号である。

同写本の年代は不明であるが、デブン寺十六羅漢堂所蔵の諸写本は、ダライラマ五世が各地寺院から回収した私蔵書といわれるため<sup>10</sup>、それによって写本書写年代の下限は限定できる。同写本を底本とした活字版のテキストはカムトゥルリンポチェ編『リクレル全集』第5巻43-56頁に収録される。

『弥勒法の歴史』は以下のような項目からなる(分節および見出しは本稿筆者による。右に写本の葉番号を添えた)。

1. 弥勒法に言及する典拠	1b1
2. 弥勒五法の思想	1b3
3. 弥勒四法にたいする註釈著者	2a3
4. 『現観莊嚴論』にたいする註釈著者	2a4
4.1. アールヤ・ヴィムクティセーナ	2a4
4.2. バダント・ヴィムクティセーナ	2b1
4.3. ハリバドラ	2b3
4.4. ジュニャーナパーダ	3a5
4.5. ラトナーカラシャーンティ	3b3
4.6. アバヤーカラグプタ	4a1
4.7. その他の註釈著者	4a2
5. 八現観について解説しない註釈	4a3

---

全集』第2輯第51巻53-156頁に収録され、Schaeffer and van der Kuijp 2009によってその校訂テキストが刊行された。この著はプトウンの仏教史や大蔵経目録に大きな影響を与えた重要な著作である。チョムデンリクレルの著作は現在、『カダム全集』を含めて、都合3種の全集において公開されており、それぞれにおいて収録作品が微妙に異なっている。それら作品の出入りの詳細に関しては加納2009: 170 註119を参照されたい。

<sup>8</sup> 『カダム全集』第2輯第53巻157-167頁。

<sup>9</sup> ただし第1葉目は3行、第6葉目は1行からなる。

<sup>10</sup> 詳しくは加納2007: 1-3を参照。

6. 『現観荘厳論』 諸註釈についてのまとめ	4b4
7. 無着、世親、ディグナーガと三性説	5a2
8. 結頌	5b4
9. 奥書	5b5

これらの内容を要約すると以下のごとくである。1. 「弥勒法に言及する典拠」では、ハリバドラ著『八千頌註』すなわち『現観荘厳論光明』とアバヤーカラグプタ著『マルマカウムディー』が、弥勒法の成立に關説する典拠として挙げられる。ただしこれら二点の典拠は本来『現観荘厳論』の成立についてのみ論じるものだが、チョムデンリクレルはそれらが『現観荘厳論』以外の4論書の成立についても論じるものとみなしており、典拠の所説を意図的に拡大解釈している点は注意を要する。

2. 「五法の思想」においては、弥勒五法それぞれの思想内容が端的に述べられる。すなわち『現観荘厳論』は中観派の二諦説を説くものであり、『荘厳経論』、『中辺分別論』、『法性分別論』は大乗經典の意図を解説して唯識派の三性説を説くものであるとする。そして『宝性論』は如来藏経などの大乘の究極の思想を説き、その内容は中観二諦説および唯識三性説に矛盾しないという。

3. 「四法にたいする註釈著者」では、『現観荘厳論』以外の4論書については無着・世親の兄弟によって註釈が著されたという。

4. 「『現観荘厳論』にたいする註釈著者」では、『現観荘厳論』にたいするインド人註釈者たちを列挙する<sup>11</sup>。この項目は全体の半分近くの分量を占める。なかでもハリバドラ、ジュニャーナパーダ、ラトナーカラシャーンティに関しては著作を行った場所やその背景にある逸話に言及しており興味深い。

5. 「八現観について解説しない註釈」では、『現観荘厳論』所説の「八現観」<sup>12</sup>の体系に關説しない『般若経』関連の註釈書について説く。

6. 「『現観荘厳論』 諸註釈についてのまとめ」では、諸註釈を大分すると八現観に關説するものとしめないものがあるが、そしてディグナーガ著『八千頌要義』はあらゆる種類の『般若経』に対応することができる思想体系を有する勝れた註釈であると述べる。

7. 「無着、世親、ディグナーガと三性説」では、唯識系統の註釈書について述べる。なおチョムデンリクレルは弥勒五法および般若經典類に註釈書を著しており、その

<sup>11</sup> 『現観荘厳論』のインド撰述註釈文献一覧については兵藤 2000: 8-16 および谷口 2002: 27-35 を参照。

<sup>12</sup> 「八現観」とは般若経の教えを修道論の立場から分類した以下の八項目を指す。すなわち、一切相智者性、道智者性、一切智者性、一切相現等覚、頂現観、次第現観、一刹那現等覚、法身のこと。前三者は菩薩が獲得すべき智慧、後四者はその獲得のための準備、そして最後の法身はその果報である。

いくつかは現存する<sup>13</sup>。時間的都合によりその全てを精査することはできなかったが、筆者が管見した限り、『十万頌般若莊嚴華』(613–614 頁)において『弥勒法の歴史』の項目 4.1 と 4.2 に近似する議論が確認された。また本書に先行して著作されたアル・チャンチュブイエーシェー作『現観莊嚴論註分析』をチョムデンリクレルが参照していると思われる箇所がみられるため、適宜、脚注の中に示した。

## 和訳と校訂に際して

以下に提示する和訳と校訂テキストは、上述した『カダム全集』第 2 輯第 53 巻 157–167 頁所収の『弥勒法の歴史』の写本影印版(略号 Ms)に基づくものである。同写本を底本とする『リクレル全集』所収の活字版テキスト(略号 K)も適宜参照し、校訂テキストにおいて異読を注記した。和訳において、本稿筆者が文脈上補った語は角括弧で括り、写本の葉番号は丸括弧内に示した。校訂テキストにおいては、文法上および文脈上訂正を要する語句は適宜妥当な形になおして注記した。注記中の略号 em. (= emendation)は本稿筆者または活字本作成者カムトゥルリンポチェによる訂正を示し、略号 conj. (= conjecture)は暫定的な訂正を示す。また、一垂線(chig shad)と二垂線(gnyis shad)の挿入・削除および、ces と zhes の交替、pa と ba の交替などについては適宜妥当な綴り方に訂正し、煩を避けるために注記を省略した。なお mngon rtogs brgyan/rgyan(『現観莊嚴論』)および sdud/bsdud pa(『宝徳蔵偈般若』)の綴り方に関して、写本には 2 種の綴り方が混在しているが、いずれも他所でアテストされた正しい綴り方であるので、本稿ではそれらを敢えて統一せずに写本そのままの読みを残した。また校訂テキストにおいて人名と地名については太字で示し、作品名<sup>14</sup>については斜体で示した。

<sup>13</sup> 『リクレル著作目録』には以下のように般若経関連の著作(同 2a4–6)および弥勒五法関連の著作(同 2a6–b1)が列挙される。(般若経関連の著作:)(1) rgyal ba'i sras yum nyi shu dbu ma dang sems tsam gnyis kyi shad [= bshad] tshul mi 'dra ba slob dpon chen po drug gi 'dod pa bskod [= bkod] pa rgyal ba'i yum rgyan gyi me tog dang | (2) rgyas pa 'bum gyi 'gyur byang drug shad [= bshad] pa dang | (3) 'phags pa sdud pa'i pin dhar tha slob dpon seng ge bzang po'i bsdud 'grel dang 'thun pa dang | (4)(5) shes rab snying po dang yi ge gcig ma'i 'grel pa nyams su len tshul dang bcas pa dang | (6) brgyad stong don bsdus kyi 'bru 'joms sa bcad dang bcas pa dang | (弥勒五法関連の著作:)(7) mngon rtogs rgyan gyi 'grel chung gi ti kka sa bcad dang bcas pa dang | (8) mdo sde rgyan 'grel pa dang sbyar nas shad [= bshad] pa dang | (9)(10) rgyud bla ma dang dbus mtha' rtsa ba'i ti ka dang | (11) chos nyid kyi ti ka sa bcad dang bcas pa. このうち少なくとも(4)(5)(7)(8)(11)は『カダム全集』第 2 輯および『リクレル全集』において収録される。

<sup>14</sup> 本書には、その現存が確認されていないテキストが数点言及されるが、和訳への注記に示したように、そのうちのいくつかがチョムデンリクレル本人の手になる『仏教史・莊嚴陽光』所収の大蔵経目録にみつかるとは特筆に価する。

## 和訳

弥勒と関連する教えが生じたあり方。(1b)

聖弥勒に礼拝。

### [1. 弥勒法に言及する典拠]

弥勒と関連する教えが生じたあり方について、ハリバドラ先生は『八千頌註』に「無着先生に懇請されて弥勒五法が著作された」と説く<sup>15</sup>。アバヤーカラグプタ先生の『マールマカウムディー』には「そうではなく、聖典結集の直後に著作された」と説かれる<sup>16</sup>。(2a)

### [2. 弥勒五法の思想]

さて『現観莊嚴論』は、思想〔の中心は〕は中観派の二諦〔説〕にある。『莊嚴経論』、『中辺分別論』、『法法性分別論』の3つは、全ての大乗經典の意図を解説するものであり、思想〔の中心〕は三性説にある。『究竟論』〔すなわち『宝性論』〕は、『如来蔵経』などの大乗の究極の思想を教えるものであり、思想は両者〔すなわち二諦説と三性説〕と矛盾せずにある。

### [3. 弥勒四法にたいする註釈著者]

それら〔弥勒五法〕は、人間界に聖無着が将来して、世親先生に解説し、『現観莊嚴論』以外の〕4つの教えの註釈を、〔その〕2人兄弟が著作された。

### [4. 『現観莊嚴論』にたいする註釈著者]<sup>17</sup>

---

<sup>15</sup> *Ālokā*, 75.17–21: tathā hi śrūyate — viditasamastaprvacanārtho labdhādhigamo 'py āryāsaṅgaḥ punaruktabāhulyenāpunaruktapradeṣe 'pi pratyekapadavyavacchedādarśanena gāmbhīryāc ca prajñāpāramitārtham unnetum aśakto daurmanasyam anuprāptaḥ. tatas tam uddiśya maitreyaṇa bhagavatā prajñāpāramitāsūtram vyākhyātam abhisamayālamkārikāśāstraṃ ca kṛtam; D 46b1–2; P 57a6–57b1: de yang 'di skad du | 'phags pa thogs med gsung rab ma lus pa'i don thugs su chud cing rtogs pa thob pa yin du zin kyang zlos (bzlas P) te gsung (gsung ba P) mang ba dang | zlos (zlas P) te gsungs pa yin pa'i phyogs la yang tshig so so'i mam par bcad pa ma gzig pa dang | zab pa nyid kyis na shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i don dpogs par ma dpyod nas yid mi bde ba rjes su thob par gyur to || de nas de'i don du bcom ldan 'das 'phags pa byams pas shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i mdo bshad pa dang mngon par rtogs pa'i rgyan gyi tshig le'ur byas pa mdzad do ||

当該箇所には、弥勒が無着のために(tam uddiśya)『現観莊嚴論』を著したことが述べられるが、無着が弥勒にその著作を懇請した点については明言されていない。

<sup>16</sup> *Marmakaumudī*, D 2b5–7; P 3a6–8: bsdus pa'i rjes la dus der gnas pa nyid na | mchog tu zab cing rjes su rtogs par dka' la rtogs par mi nus zhes pas thugs rjes de rtogs pa'i don du 'phags pa byams pas mngon par rtogs pa'i rgyan gyi tshig le'ur byas pa'i bstan bcos kyis gsal bar mdzad kyi | 'phags pa thogs med kyis byas nas dus phis byas zhes pa ni seng ge bzang po la sogs pa mams kyi 'khrul pa ste | sngon du byas pa la ma bshad ces pa ni gzhan dag gi'o ||

<sup>17</sup> チョムデンリクレルは『十万頌般若莊嚴華』(612.2–4)においても同様に、『般若経』を『現観莊嚴論』と結びつけて説明する註釈著者として、アールヤ・ヴィムクティセーナ、バダಂತ・ヴィムクテ

#### [4.1. アールヤ・ヴィムクティセーナ]

『現観莊嚴論』はその2人に註釈されなかったが<sup>18</sup>、世親先生の4弟子のひとりアールヤ・ヴィムクティセーナが、複数章からなる『二万五千頌』<sup>19</sup>を八章にして<sup>20</sup>、前後の齟齬をだいたい『現観莊嚴論』にあわせて直して、註釈〔内容〕もそれとあわせた<sup>21</sup>。〔同書の〕末尾で「人がかつて経験していない<sup>22</sup>」というのは(2b)、四聖〔声聞、独覚、菩薩、仏〕の現観について説く註釈が〔アールヤ・ヴィムクティセーナのおかげで〕人間界に現れたことにかんして「かつて」と説いたのである。

#### [4.2. バダanta・ヴィムクティセーナ]

それからバダanta・ヴィムクティセーナは、『現観莊嚴論』の著作条件(I.1-2)、発心の分類(I.19-20)、僧伽二十(I.23-24)、順決択分の詳説(I.27-36)、道知〔章〕末尾の3偈(II.29-31)、三智の要義(III.16)、順解脱分の詳説(IV.33-34)、「大海中の川の如く」(V.36)<sup>23</sup>云々という〔都合〕23の偈が欠如している〔『現観莊嚴論』の異本〕を複数章からなる『二万五千頌〔般若〕経』と結びつけて解説した<sup>24</sup>。

---

イセーナ、ハリパドラ、ジュニャーナパーダ、ラトナーカラシャーンティ、アバヤーカラグプタを数える。

<sup>18</sup> チョムデンリクレルは同書「5. 八現観について解説しない註釈」(4a3-b4)の項目下で無着作『タットヴァヴィニシュチャヤ』と世親作『バダティ』に言及するが、同二書を『現観莊嚴論』への直接の註釈とは見なしていないようである。

<sup>19</sup> 「複数章からなる『二万五千頌』とは、76の章から成るカンギユル所収本(D 9, P 731)指す。

<sup>20</sup> 8章立ての『二万五千頌』とは、テンギユル所収本(D 3790, P 5188)を指す可能性が考えられるが、その奥書によると同書はハリパドラの編集とされるため(兵藤 1984 参照)、同書をアールヤ・ヴィムクティセーナの編集とするチョムデンリクレルの当該の記述と一致しない。

<sup>21</sup> 『十万頌般若莊嚴華』(613.1-3)には以下のような類似表現がみられる: 'phags pa mnam grol sdes mngon rtogs rgyan dang mthun par chad lhag med pa'i nyi khri le brgyad ma dang | de'i 'grel pa mdzad de | de las ni mngon rtogs su 'chad pa mams byung ngo || 「アールヤ・ヴィムクティセーナは『現観莊嚴論』に準拠して過不足のない『八章本二万五千頌般若』とその註釈を著作なさり、そこから〔『二万五千頌』を八〕現観において説く〔伝統〕が現われた」。また、『仏教史・莊嚴陽光』(6b4; Schaeffer and van der Kuijp 2009: cat. no. 3.2)にもアールヤ・ヴィムクティセーナが『二万五千頌』を編纂した旨が説かれる('phags pa zhes [= sdes] kun la sbyar nas nyi khri lnga stong pa shu lo ka de nyid cig bam po bdun bcu rtsa drug)。

<sup>22</sup> *Vṛtti*, D 211b5-6; P 248b3-4: de ltar 'jig rten 'di ni song zhing rjes song lam la brten pa zhes bya dang || gang phyir sangs rgyas lam gang yin par blos byas min yang mthong ba lkog gyur pa || des na kho bos 'gro ba mams la phan phyir mi yis sngan chad ma myong 'di || shes rab pha rol phyin tshul mkhas pa mams la phyogs tsam gsal bar byas pa yin ||; Skt. (NGMPP Reel No. A37/9) fōl. 106v6: [前半部は写本破損のため判読不能] paṭhi yan narāḥ kṛtadhiyo 'py asmin parokṣeṣaṇāḥ | ity asmābhir idam hitāya jagato 'nālīdḥapūrvaṃ naraiḥ prajñāpāramitānayasya viduṣāṃ dīnāmātram āviṣkṛtam ||

<sup>23</sup> AA, V.36: sarvāḥ sarvābhisāreṇa nikāmaphalaśālinam | bhajante taṃ mahāsattvaṃ mahodadhīm ivāpagāḥ ||; rgya mtsho che la chu bo bzhin || 'bres bu mchog gis spa ba yi || sems dpa' chen po de la ni || mnam pa kun tu rten par byed ||

<sup>24</sup> この一節は文章表現が簡潔すぎるため難解であるが、幸いにも同著者の『十万頌般若莊嚴華』において同一の内容が詳細な論じられているため、それを対照することによって内容を正確に把握することができる。すなわちここではバダanta・ヴィムクティセーナが、都合 23 偈(AA I.1-2, I.19-20, I.23-24, I.27-36, II.29-31, III.16, IV.33-34, V.36)を欠く『現観莊嚴論』の異本を使用していることをチョムデンリクレルは示唆している。チョムデンリクレル著『十万頌般若莊嚴華』(613.3-614.2): de nas btsun pa grol sdes mngon rtogs rgyan gyi dgongs 'brel dang | sems bskyed nyi shu rtsa gnyis dang | dge 'dun nyi shu dang |

### [4.3. ハリバドラ]

それからハリバドラ先生が『現観莊嚴論』の註釈を] 著作した様については、『文殊口伝』に「大マドヤデーシャのカピラ都城のタキシラ地方において、ハリバドラという〔名前〕で名声を得たその師は、よろこんで教えを受けて多くの典籍を学んだ」とある<sup>25</sup>。その『文殊口伝』の] 註釈に「マガダのナーレンドラ付近のカピラ都城タキシラ地方に〔ハリバドラ先生は〕いらした」と説かれる<sup>26</sup>。さてその地方では全ての王が人非人によって殺されて〔王が不在となってしまったため、新たな王に〕交代する必要が生じた。そのときガンガデーヴィーを成就した牛飼が人非人を殺し、彼が王位に就き、ゴーパーラ王と呼ばれた<sup>27</sup>。その妻〔たち〕の一人が、王を支配することによって財産を湖に移して、その龍を支配した。(3a)そこで龍の息子が生まれ、シュリーパーラ王と呼ばれた。彼が堂宇を建てたいと望み、龍が湖を干上がらせてそこに建てさせたものを、トリカトゥカ湖の隠所という<sup>28</sup>。そこにおいて〔ハリバドラは〕『〔二万五千頌般若〕 八章本略註』、『八千頌註』、『小註』という三部作<sup>29</sup>を著作な

---

nges 'byed cha mthun gyi rgyas bshad shwa lo ka bcu dang | mkhyen gsum don bsdu dang | thar cha rgyas bshad dang | rgya mtsho che la chu bo bzhin | 'bras bu mchog gi sba ba la sogs pa shwa lo ka nyi shu rtsa gsum med pa'i mngon rtogs rgyan dang nyi khri le mangs sbyar ba byas nas de dang mthun pas gsham du | de ltar bdag dang 'gal ba'i skye bos rab tu gnod pa phra mo'ang ni med | bya ba dang lam shes kyi gsham gyi shwa lo ka gsum med par | gzugs sogs dus gsum du med pa || shin tu dag pa mtha' med pa || de dag mtha' ni mi mkhyen pa || thub pa'i chos mngon rtogs pa yin || zhes bya ba yod pa byas so || 「それからバダ Tantra・ヴィムクティセーナは『現観莊嚴論』の著作条件(I.1-2)、22 種発心(I.19-20)、僧伽二十(I.23-24)、順決択分を詳説する 10 偈(I.27-36)、三智の要義(III.16)、順解脱分の詳説(IV.33-34)、「大海中の川の如く最勝の果によって勇敢な」云々(V.36)という〔都合〕 23 偈(上記 20 偈と下記 II.29-31 をあわせて 23 偈になる)が欠如している『現観莊嚴論』の〔異本〕と複数章からなる『二万五千頌』を結びつけて、それに準じて〔著作の〕末尾で「同様に、私と矛盾する〔思想的立場をもつ〕人によって損害される〔要素〕は〔本書においては〕微塵もない」(D 3788, 80a3 参照)と〔言い、さらにバダ Tantra・ヴィムクティセーナの註釈には〕道智〔章〕末尾の 3 偈(II.29-31)が欠如しており、〔代わりに〕『色などが三時に存在しない〔ことを知って、〕無辺なる極清浄なるものの辺を知らないことが、牟尼の徳性を現観することである。』(D 3788, 81a5-6 参照)という〔偈〕があるものとする。」

ここにチョムデンリクレルが指摘するように、実際、バダ Tantra の註釈(D 3788, P 5186)には上記の諸偈が欠如している。ただし『現観莊嚴論』V.36 のみはバダ Tantra の註釈に引用されているため、チョムデンリクレルの記述と一致しない。

<sup>25</sup> *Mukhāgama*, k. 3, D 1a4-5; P 2a4-5: dbus kyi yul chen kha bir grong khyer rdo 'jog tu || bzang po seng nge zhes byar grags pa rab thob pa || bla ma de ni mnyes byas lung thob gzhung mang thos ||.

<sup>26</sup> *Mukhāgamavṛtti*, D 89a7-b1; P 107a4-6: dbus kyi yul chen zhes pa la sogs pa'o || de la bdag cag gis bla ma chen pos dang por yul khams ni dbus zhes bya ste | na le ndra'i phyogs so || yul gyi ming ni kha pir zhes bya'o || de na grong khyer rdo 'jog ces bya ba yod do || de yi phyogs gcig na 'phags pa mang pos bkur ba'i sde pa gzhung sna tshogs kyis dub pa las | shes rab kyi pha rol tu phyin pa la sogs pa thob pa | bzang po seng ge zhes bya bar grags pa rab tu thob pa zhig yod pa de mnyes pa byas nas ...

<sup>27</sup> ゴーパーラ「牛飼い」の語義解釈に由来する逸話であろうか。

<sup>28</sup> チャンチュブイエーシェー作『現観莊嚴論註分析』95.1-96.1 参照。

<sup>29</sup> 『八章本〔二万五千頌般若〕略註』(下記参照)、『八千頌註』(= *Ālokā*)、『小註』(= *Vivṛti*)のうち、チョムデンリクレルは『小註』に対して註釈を著したことが『リクレル著作目録』(2a6)から知られ(mngon rtogs rgyan gyi 'grel chung gi ti kka sa bcad dang bcas pa)、『リクレル全集』第3巻 1-778 頁所収『勝者母註現観莊嚴華・所知海』に対応すると思われる(同書『所知海』3 頁にはハリバドラ『小註』を解

さった。〔ハリバドラに帰される〕『〔宝徳〕蔵〔偈般若〕註』については<sup>30</sup>、ブンタク  
スンパ<sup>31</sup>とゴク翻訳師は〔偽作として〕非難されるものだと主張する〔が〕<sup>32</sup>、〔アバ  
ヤーカラグプタは〕『マルマカウムディー』において「ハリバドラによって著された」  
と記して〔その非難を〕斥けているようだ<sup>33</sup>。『八千頌註』には「美しいトリカトゥカ  
の堂宇に布施をなして富をえたシュリーダルマパーラの時代に」と説かれる<sup>34</sup>。その  
王はティデソンツェン王と同時代である<sup>35</sup>。

#### [4.3. ジュニャーナパーダ]

彼〔ハリバドラ〕の弟子デーヴァブッダジュニャーナ〔すなわちジュニャーナパー  
ダ〕は聖文殊の化作曼荼羅において灌頂を受けて最高の大印を成就した者であり、  
『〔宝徳〕蔵〔偈般若〕註』を著作なさった<sup>36</sup>。同書は(3b)ナーレンドラ寺の比丘尼グ

説対象とする旨が述べられる)。また、上記『八章本略註』がテンギェル所収の『八章本二万五千頌』  
(D 3790, P 5188)を指すか否かについては判定し難い。このテンギェル所収本(D 3790, P 5188)は奥書に  
よるとハリバドラが編纂したものとされるが、当該の『八章本略註』の「略註」(*bsdus don gyi 'grel pa*)  
という題名は、経典そのものではなく、むしろ何らかの註釈書を指しているように見受けられる。な  
お、兵藤 1984 は、テンギェル所収本(D 3790, P 5188)について、ハリバドラの他著作との間にみられ  
る思想的な齟齬を根拠にして、ハリバドラ以外の他の何者かによって編纂された可能性を指摘する。  
<sup>30</sup> ハリバドラ作『宝徳蔵偈般若註』(*Ratnagūṇasañcayagāthāvyākhyā*)はチベット語訳(D 3792, P 5190)  
が現存し、梵文原本は断片的に存在する(Jiang 2000 参照)。『リクレル著作目録』(2a5)には、このハリ  
バドラ註に随順したチョムデンリクレル自身の『宝徳蔵偈般若』註が記載され('phags pa sdud pa'i pin  
dhar tha slob dpon seng ge bzang po'i bsud [= sdud] 'grel dang 'thun pa)、『カダム全集』第2輯第56巻に  
収められる。

<sup>31</sup> ブンタクスンパはスティラパーラ(*Sthirapāla*, brTan skyong)とも呼ばれ、ゴク・ロデンシェーラプに  
よっての般若学の師である。彼はロデンシェーラプによってチベットに招かれ、共訳作業に従事した  
とされる。詳しくは Kramer 2007: 41 を参照。

<sup>32</sup> チャンチュブイエーシェー作『現観莊嚴論註分析』96.2-3 参照。

<sup>33</sup> *Marmakamudī*, D 123a6-7; P 140b4-5: 'di nyid kyis na sdud (sdug P) pa tshigs su bcad pa'i 'grel pa las  
thams cad shes pa nyid sa bdun par mam par gzhag pa'i seng ge bzang po'i bshad pa ni mi 'thad do ||

<sup>34</sup> *Ālokā*, 994.12-19: khyāto yo bhūvi puṇyakīrtinīcayo vidvajjanālamkr̥taḥ tasmin sarvaguṇākare  
trikuṭakaśrīmadvihāre śubhe | dānāl labdhamahodayasya karuṇādevasya dharmātmanah s̄nāthyena  
sukhopadhānanilaye sthitvā vivekāspade || krudhyatkuṅjarakumbhapīṭhadalanavyāsaktasaktiyātmanah pu-  
nyābhīyāsakṛtābhīyogajavaśāt sampat samādāyinaḥ || rājye rājabhatādivaṃśapatitāśrīdharmapālasya vai  
tattvālokaavidhāyīnī viracitā satpañjikeyaṃ mayā || ; D 340b4-6; P 425a7-b2: gang zhiḡ sa stengs bsod nams  
grangs tshogs ldan par rab grags mkhas pa'i skye bos brygan || yon tan kun gyi 'byung gnas dpal ldan tī (ti P) ka  
du (tu P) ka'i gtsug lag khang bzangs (bzang P) der || sbyin las 'byor pa chen po thob 'gyur chos kyi bdag nyid  
snying rje lha yi ni || ngon bcas bde ba'i rkyen gzhi (bzhi P) mkhas pa'i gnas gyur khang pa dag tu gnas bcas nas  
|| glang chen khros pa'i klad pa mam par 'gems byed nus pa dang ldan bdag nyid can || bsod nams la sbyangs  
brtson pa las byung phun tshogs mams ni kun tu sbyor ('byor P) gyur pa || rgyal po mchog nga (om. P) rgyud  
(brgyud P) rgyal rigs nas 'khrungs rgyal po dpal ldan chos skyong ring la ni 'dka' 'grel bzang po de nyid snang  
ba zhes bya 'di ni bdag gis mam par brtsams ||

<sup>35</sup> ティデソンツェンは、ティソンデツェン王の息子で、Dotson 2007 によると 798-800 年および  
802-815 年に吐蕃王国を統治したという。Huntington 1984: 39 によれば、ダルマパーラ王の治世は 8  
世紀終わりから 9 世紀初めといわれる。

なおハリバドラの伝記については『プトゥン仏教史』(p.163-165)を参照。

<sup>36</sup> *Sañcayagāthāpañjikā*, D 3798, P 5196. 本文中の「聖文殊の化作曼荼羅」という一節については、以  
下のジュニャーナパーダの自著『大口伝書』に典拠がある。「秋の早朝、日の出時に、文殊の曼荼羅

ナミトラに懇請されて著されたものであるので、「グナミトラの御傍、この註釈はここで著作された」といわれ<sup>37</sup>、『文殊口伝』には「そこで考察智が生じて、吉祥ナーレンドラ寺でグナミトラという智者の御傍にて、愚者〔たる私〕が論書の一片を著作した」と〔ジュニャーナパーダ自身によって〕説かれた<sup>38</sup>。それゆえこの者(グナミトラ)を相承系譜の中に数えるのは誤りである。その先生〔ジュニャーナパーダ〕には学者・成就者交々18人の弟子が現われたと『口伝書註』に説かれる<sup>39</sup>。

#### [4.4. ラトナーカラシャーンティ]

それから、ヴィクラマシーラ寺院の東方の門衛であるシャーンティパ先生は『二万五千頌』の註『シュッダマティー』<sup>40</sup>と、『八千頌』の註『サーラタマー』<sup>41</sup>と、『般若波羅蜜口決』<sup>42</sup>という三部作を著作なさった。なおダルマパーラ王の息子デーヴァパーラ<sup>43</sup>は、成就者ラワパ〔すなわちカンバラ〕が意のままに生を受けたものであり<sup>44</sup>、彼はヴィクラマ〔シーラ〕のお堂を建立し、ブッダジュニャーナパーダに灌頂を(4a)

---

輪が化作され、私(ジュニャーナパーダ)はこの(啓示の)意味を受けとめるために、誓願を立てた。」(D 1854, Di, 3a3; P 2716, Ti, 2b7-8: ston zlar ba'i (sic) tho rangs skya rengs shar dus su || 'jam dpal dbyangs kyi dkyil 'khor khor lo sprul pa la || bdag gis don 'di blang phyir gsol ba rab tu gdag ||; 西山頭大氏にご教示による。)

<sup>37</sup> *Sañcayagāthapañjikā*, D 189a4-5; P 223a3-4: 'bras bu la lta gzhan gyis kyang || bcol na ci (ci'i P) phyir 'bad mi bya || gu nas mi tra kho na'i ngor || dka' 'grel 'di ni 'dir byas so ||.

<sup>38</sup> *Mukhāgama*, kk. 3-4, D 1a5-2a1; P 2a6-2b1: de la mam dpyad rig 'byung shī len (om. P) nā (na P) lendrar (lā ndar P) || yon tan bshes gnyen zhes bya rigs can de yi ngor || blun blos (bros P) rab tu byed pa phyogs 'ga' rtsom byed pa'i || brod pas der gnas mams la gzhung des phan gdags par || bsams nas der gnas rtsom dang ston sogs rab tu byas (bya P) ||.

<sup>39</sup> *Mukhāgamavṛtti*, D 90a4-90b1; P 108a4-8: de yang rdzu 'phrul dang ldan pa'i slob mas bskor ba'o || de dag kyang gang zhe na | bram ze tsa tra ra zhes bya ba dang | bram ze gu hya ba rta(ha par ta P) zhes bya ba dang | rgyal rigs manju shrī zhes bya ba dang | rje'u rigs pu ma bha dra (tra P) zhes bya ba dang | dmangs ris tī bam ka ra zhes bya ba | dmangs ris kha ma pu tra zhes bya ba dang | smad 'tshong ma ā lo ki (gi P) zhes bya ba dang | smad 'tshong ma sa du zhi la zhes bya ba ste | de kun gyi yod byad dang gos zas ni lha mo nor gyi rgyun zhes bya ba des nyi ma re re zhing gser gyi ma zha bcu dang mu tig gi har phyed dang kārṣā pa ṇa (karṣa ba na P) sum brgya sbyor ro || bla ma dam pa de yi drung du lo dgu'i bar du 'dud cing skye ba gcig gis thogs par byas so || 'dus pa'i rgyud chen zhes pa la sogs pa ni bla ma'i dgongs pa ste | de la 'dus pa'i rgyud ni mal 'byor mams so || de yi 'grel pa ni mal 'byor bslab (bslabs P) pa sme sha can gyi pu mo bi ma la mu tri'o || de dang bcas par bco brgyad bar du mnyan pa ni zla ba bco brgyad kyi bar du bsgrubs pa'o ||.

ジュニャーナパーダの略伝については『プトウン仏教史』(p. 165)を参照。なお、『現観莊嚴論』に対する註釈『般若燈鬘』(*Prajñāpradīpāvali*, D 3800, P 5198)を著したカシュミールのブッダシュリージュニャーナ(12世紀ころ)は、同名異人である。この『般若燈鬘』のチベット訳は、同著者による同名作品の梵本(健代淵応校『Abhisamayalamkāra-sāstra-ṭīkāの研究』、大阪:清光院清水寺、1973年)とは内容が一致しない。

<sup>40</sup> *Abhisamayālamkārikārikāvivṛtti Śuddhamatī*, D 3801, P 5199.

<sup>41</sup> *Āryāṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāpañjikā Sāratamā* (or *Sārottamā*), D 3803, P 5200. Skt.: P.S. Jaini (ed.), *Sāratamā, A Pañjikā on the Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāsūtra*, Patna, 1979.

<sup>42</sup> *Prajñāpāramitopadeśa*, D 4079, P 5579. 梵文写本については『チベット梵文貝葉目録』(p. 171, nos. 40 [5葉], 42 [12葉])を参照。

<sup>43</sup> デーヴァパーラ王は Huntington 1984 によれば 9 世紀初頭から後半までパーラ朝を統治したといわれる。

<sup>44</sup> すなわち生まれ変わりのこと。

懇請した。シャーンティパ先生の時代にはマハーパーラ王が〔在位して〕いた<sup>45</sup>。

#### [4.5. アバヤーカラグプタ]

それから、アバヤーカラ先生は『八千頌』の註『マルマカウムディー』と『現観莊嚴論』の内容を完全に教示する『牟尼意趣莊嚴』<sup>46</sup>の2部作を著作なされた。

#### [4.6. その他の註釈]

以上は『〔般若〕経』の内容を『現観莊嚴論』に準じて解説する註釈であるが、〔ハリバドラの〕『〔現観莊嚴論〕小註』にたいしてはダルマミトラ、クラダッタ<sup>47</sup>、ラトナキールティ、プラジュニャーカラマティ、クマーラシュリーという5人の先生方の註釈がある<sup>48</sup>。

#### [5. 八現観について解説しない註釈]

さて、〔八〕現観について解説しない註釈について述べると、そのうち、中観論書も〔八現観には言及しないが〕『〔般若〕経』の〔本質的〕内容である空性を説くので経の内容を註釈するものである〔といえる〕。聖無着は、三智までの経文を注解した『タットヴァヴィニシュチャヤ』を著作したと説かれ<sup>49</sup>、世親先生の『パッダティ』<sup>50</sup>

<sup>45</sup> Huntington 1984によれば、マハーパーラ王は10世紀後半から11世紀前半にパーラ朝を統治したといわれる。

<sup>46</sup> *Munimatālamkāra*, D 3903, P 5299. 梵文写本については『チベット梵文具葉目録』(p. 171, no. 23 [202葉])を参照。

<sup>47</sup> クラダッタ(\*Kuladatta, rigs kyi byin pa)の註釈は現存が確認されていないが、チョムデンリクレルの『仏教史・莊嚴陽光』所収の大蔵経目録に確認できる。『仏教史・莊嚴陽光』(31a1; Schaeffer and van der Kuijp 2009: cat. no. 22. 157): de [=grel chung] 'i ti ka rigs kyis byin pa dang、および同書(40b7; Schaeffer and van der Kuijp 2009: cat. no. 27. 25): 'grel chung ti ka rigs byin gyi stod dang 参照。これはトルンパ著『ロデンスェーラブ伝』所収の翻訳文献目録(No. 22)に、ハリバドラ小註(*l'i vṛti*)への註釈としてその名が挙げられる de 'i ti ka rigs kyi byin gyi stod に対応するものと思われる。

<sup>48</sup> クラダッタを除く4人の註釈は順に以下のとおりである。Dharmamitra, *Abhisamayālamkāraḥ kīrtikā-prajñāpāramitopadeśaśāstraṅgikā Prasphuṭapadā*, D 3796, P 5194; Ratnakīrti, *Abhisamayālamkāravṛtti Kīrtikalā*, D 3799, P 5197; Prajñākaramati, *Abhisamayālamkāravṛttipiṇḍārtha*, D 3795, P 5193; Kumārasrībhadrā, *Prajñāpāramitāpiṇḍārtha*, D 3797, P 5195.

<sup>49</sup> 本文中の「三智までの経文」とは、『二万五千頌般若』を8章に分類した時のはじめの3章、すなわち一切相智者性章・道智者性章・一切智者性章までを指すと思われる。無着作『タットヴァヴィニシュチャヤ』は現存が確認されていないが、ハリバドラには以下のように言及される。*Ālokā*, p. 1.15–17: bhāṣyaṃ tattvaviniścāye racitavān prajñāvatām agrāṇiḥ, āryāsaṅga iti prabhāsvarayaśās, tatkartṛsāmarthyataḥ | bhāvābhāvavibhāgapakṣanipuṅjāñānbhimānonnataḥ, D 2a1–2, P 2b2–3: 'phags pa thogs med zhes bya grags pa gsal ldan shes rab ldan pa'i mchog gyur pas || de nyid mam par nges par bshad pa rab tu sbyar mdzad des (nges P) mdzad pa yi mthus || dngos dang dngos med mam dbye'i phyogs la mkhas par shes pa'i mngon rlom gyis mtho ba ||; cf. *l'i vṛti*, p. 1: jagatsaṅgaktṛtāsaṅgenāryāsaṅgena tāyinā | kṛtā vyākhyā mahāśāstre śrutvā nāthājītat svayaṃ; D 8b2–3, P 93a8–93b1: 'gro la chags pas kun chags mdzad || 'phags pa thogs med skyob nyid kyis || mi pham mgon la gsan nas ni || bstan bcos chen po'i mam bshad mdzad ||. チョムデンリクレルによると『タットヴァヴィニシュチャヤ』はチベットには伝わっていないという。『仏教史・莊嚴陽光』(47b1–3; Schaeffer and van der Kuijp 2009: cat. no. 29. 33: thogs med kyi de nyid mam nges ... la sogs pa ni bod na mi snang ngo)参照。

は三門に関連するといわれ、三門と(4b)十一異門<sup>51</sup>についての解説をなした。その〔世親の〕弟子ディグナーガ先生は 32 義について説示する『八千頌要義』〔を著し〕<sup>52</sup>、その註釈は〔トリ〕ラトナダーサ先生によって著された<sup>53</sup>。ダムシュトラセーナ先生も世親と同様の説明をなし、それ〔世親著『パッダティ』〕よりもさらに大部の〔註釈〕を著作なさったが、〔現存チベット訳において〕「これらの病を治癒した後に」〔『現観莊嚴論』第 5 章 34 偈〕以降の経文註釈は翻訳されなかったようである<sup>54</sup>。カマラシーラ、ヴィマラミトラ、ジターリの 3 人の先生方は『般若心経』の註釈を著作なさった<sup>55</sup>。カンバラすなわちカンバラーンバラ先生は『般若波羅蜜要義九偈』と『般若波

<sup>50</sup> 世親作『パッダティ』は現存が確認されていないが、ハリバドラーには以下のように言及される。*Ālokā*, p. 1.18: ācāryo vasubandhur arthakathane prāptāspadaḥ paddhatau; D 2a2, P 2b3-4: slob dpon dbyig gnyen gyis ni gzhung (gzhung P) gi 'grel bar don bshad pa la gnas thob gyur ||; cf. *Viṅṅti*, p. 1: 'gro don rtsa lag dbyig gi gnyen || rang gi mos pa gtsor byed pas || shes bya nang gi yin pa la || yang dag rten nas nmam par bkrol ||

プトゥンは、世親作『パッダティ』がダムシュトラセーナ作『プリハッティーカー』(D 3807, P 5205)を指すと述べて両者を同一作品であることを示唆するが(『プトゥン仏教史』、p. 230 参照)、それに対してチョンムデンリクレルは、世親作『パッダティ』とダムシュトラセーナ作『プリハッティーカー』を別作品として考える。同様の議論はチョンムデンリクレル作『十万頌般若莊嚴華』(612.1-2)にも見られる('di dag gi tshig zhib mo sgo gsum nmam grangs bcu gcig tu 'chad pa ni slob dpon dbyig gnyen dang | slob dpon mche ba'i sdes bshad pa bzhin te | de gnyis kyang sems tsam dang dbu ma'i lta ba tha dad du snang ngo ||)。またツォンカパもチョンムデンリクレルと同様に考える(谷口 2002: 34、註 13 参照)。

<sup>51</sup> 「三門と十一異門」については例えば以下を参照。ダムシュトラセーナ作『プリハッティーカー』(*Śatasāhasrikāprajñāpāramitābhrāṭṭikā*), D 3807, 24a4-7; P 5205, 27b4-8: shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di bshad pa ni | bcom ldan 'das kyi sgo gsum gyis bstan te | mgo smos pas go ba dang | nmam par spros nas go ba dang | drang dgos pa'i [= pas?] 'dul ba dang | 'dul ba nmam pa gsum las brtsams te | mdor bstan pa'i sgo dang | 'bring du bstan pa'i sgo dang | rgyas par bstan pa'i sgo ste | sgo gsum dang nmam grangs bcu gcig gis bshad de | de la nmam grangs bcu gcig ni dang po śā ri'i bu la bka' stsal te bshad pa gcig dang | rab 'byor la bka' stsal te bdhad pa lnga dang | brgya byin la bka' stsal te bshad pa gnyis dang | byams pa la bka' stsal te bshad pa gnyis dang | byang chub sems dpa' chos 'phags dang rtag tu ngu'i gtam glengs nas gnas brtan kun dga' bo la bka' stsal te yongs su gtad pa gcig dang 'di dag ni nmam grangs bcu gcig go || 「この般若波羅蜜に対する説明は、世尊が三門によって説示した。〔教への〕初頭句のみに言及するだけで〔教え全体を〕理解する者(\*udghaṭitajña)、詳細な説明を通じて理解する者と(\*vipañcitajña)、教導によって導かれる者、という三種類の教化に始まり、〔各々〕簡略な説示の門・中位の説示の門・詳細な説示の門という三門と、十一異門によって説明された。そのうち十一異門とは先ず、一度のシャーリプトラへの教説と、五度のスプーティへの教説と、二度のカウシカへの教説と、二度の弥勒への教説、ダルモードガタ菩薩とサダーブラルディタ菩薩の話に始まり、長老アーナンダにご垂示なされて伝えた一度〔の教説〕、以上が十一異門である。」三門十一異門については磯田 1996 および『プトゥン仏教史』(p. 29)を参照。

<sup>52</sup> すなわち *Āryaprajñāpāramitāpiṇḍārtha* のこと(本稿末尾文献表 *Piṇḍārtha* を参照)。32 義については下掲註 59 を参照。

<sup>53</sup> *Āryaprajñāpāramitāpiṇḍārtha(saṃgrahakārikā)vivaraṇa*, D 3810, P 5208; 大正蔵 No. 1517『仏母般若波羅蜜多円集要義釈論』。

<sup>54</sup> *Āryasatasāhasrikāpañcaviṃśatisāhasrikāṣṭādaśasāhasrikāprajñāpāramitābhrāṭṭikā*, D 3808, P 5206。同書の梗概については磯田 1997 を参照。

<sup>55</sup> Kamalaśīla, *Prajñāpāramitāhṛdayaṭīkā*, D om., P 5221; Vimalamitra, *Āryaprajñāpāramitāhṛdayaṭīkā*, D 3818, P 5217。ただしジターリの『般若心経註』は現存が確認されていない。『仏教史・莊嚴陽光』所収大蔵経目録にはその名が記載される(33b1; Schaeffer and van der Kuijp 2009: cat. no. 24. 14: sher snying 'grel pa mdze ta ris byas pa dang)。Schaeffer and van der Kuijp 2009 は、このジターリの註をアティシャ作の『般若心経註』(D 3823, P 5222)に同定するが、その根拠は不明である。

『羅蜜修習口決』という 2 書を著作なさり<sup>56</sup>、バヴァヴァイローチャナ先生は『般若波羅蜜要義』を著作なさった<sup>57</sup>。

#### [6. 『現観莊嚴論』諸註釈についてのまとめ]

そこで八現観について説く諸註釈は、広中略〔すなわち『十万頌般若』、『二万五千頌般若』、『八千頌般若』、『一万八千頌』、『[宝徳] 蔵偈 [般若]』の五典籍を四聖の現観として解説する。〔八〕現観について説かない諸註釈は、〔上記の〕各々の経を(5a)別の方法で解説する。

『八千頌要義』は、現観次第を説く経と真髓義を説く経と〔をあわせた〕「〔般若〕母子二十」<sup>58</sup>全てを解説することができる。なぜなら〔『八千頌要義』所説の〕32〔項目〕<sup>59</sup>に含まれない内容はそれら〔の般若経類〕には存在しないからである。それゆえ同書は經典註釈であり、非常に勝れている。

#### [7. 無着、世親、ディグナーガと三性説]

また無着兄弟とディグナーガは三性説について解説した。〔これは、〕聖弥勒が仏に般若の意味を懇請して〔仏が〕三性説の点からその意味を仰った〔ところの「弥勒請問章」の所説〕に従うものである。『要義』に「般若波羅蜜とは三種の教えに依拠する」といい「仏は他のことはお説きにならなかつた」と説く如くである<sup>60</sup>。その他の

<sup>56</sup> Kambala, *Navaśloki*, D 4462, P 5210, 5906, Skt.: Tucci 1956: 209–231, Pandey 1997: 1–9; Kambala, *Ārya-prajñāpāramitopadeśa*, D 2642, P 5123.

<sup>57</sup> バヴァヴァイローチャナ作『般若要義』は現存が確認されていないが、『仏教史・莊嚴陽光』所収大蔵経目録にはその名が記載されている(33b1–2; Schaeffer and van der Kuijp 2009: cat. no. 24. 17: slob dpon legs ldan mam snang gis mdzad pa pa'i sher phyin kyi pin dar tha)。Schaeffer and van der Kuijp 2009 は、この『般若要義』をアティシヤ作の同名作品『般若要義』(D 3804, P 5201)に相当する可能性を示唆する。

<sup>58</sup> 「〔般若〕母子二十」は般若經典類に属する 20 のテキストを指すものとおもわれるが詳細は不明。『リクレル著作目録』(2b4–5)には「母子二十」に関連する著作(未発見)が記載され(rgyal ba'i sras yum nyi shu dbu ma dang sems tsam gnyis kyi shad [= bshad] tshul mi 'dra ba slob dpon chen po drug gi 'dod pa bskod [= bkod] pa rgyal ba'i yum rgyan gyi me tog)、また『仏教史・莊嚴陽光』(6b3–7a3; Schaeffer and van der Kuijp 2009: cat. no. 3. 1–3. 18)では都合 18 の般若經典が列挙される。なお「母子十七」(yum sras bcu bdun)といえ、八現観を説く 6 点の「母」般若経および、小部の 11 点の「子」般若経を指す。すなわち『十万頌般若』、『二万五千頌般若』、『一万八千頌般若』、『一万頌般若』、『八千頌般若』、『宝徳蔵偈般若』、以上 6 点の「母」般若、そして『七百頌般若』、『五百頌般若』、『三百頌般若(金剛般若)』、『般若理趣百五十頌』、『五十頌般若経』、『二十五門般若』、『善勇猛般若』、『帝釈般若』、『一字般若』、『小字般若』、『般若心経』の 11 点の「子」般若からなる。『プトゥン仏教史』216–217 頁および『黄金鬘』8 頁参照。

<sup>59</sup> 32 項目とは、10 種の拒絶(vikṣepa)、16 空、基盤(āśraya)、支配(adhikāra)、業(karma)、兆標(liṅga)、罪(āpat)、功德(anuśamsa)を指す。Prajñāpāramitāpiṇḍārthavivarāṇa, D 3810, 96a1–2 参照。

<sup>60</sup> Piṇḍārtha, kk. 27–29, prajñāpāramitāyām hi trīn samāśrītya deśanāḥ | kalpitām paratantram ca pariniṣpannam eva ca || nāstīyādīpadaiḥ sarvaṃ kalpitām vinivāryate | māyopamādīrṣṭāntaiḥ paratantrasya deśanā || caturdhā vyavadānena pariniṣpannakīrtanam | prajñāpāramitāyām hi nānyā buddhasya deśanā ||; D 293b4–6; P 336b2–4: bstan pa gsum la yang dag brten || brtags pa dang ni gzhan dbang dang || yongs su grub pa kho na'o || med ces bya la sogs tshig gis || brtags pa thams cad 'gog pa ste || sgyu ma la sogs dpe mams kyiis || gzhan gyi dbang ni

諸註釈は、思想的には中観〔思想〕について解説するものが多いが、シャーンティパなどによる三性説の点からの〔唯識思想についての〕解説も種々みられる。

『十七本地』、『撰決撰分』、『撰事分』(5b)、『撰異門分』、『撰積分』との五部書〔すなわち『瑜伽師地論』と綱要書二部作<sup>61</sup>は、弥勒によって説かれ、無着によって要約されたと学者たちは述べる。彼〔無着〕によって著された『解深密経註』や、世親によって著された『十地経註』、『三性説論』など、無着兄弟による著作はたくさんあるので、〔それらを含まない、世親著〕「八部論書」や「弥勒と関連する二十法」<sup>62</sup>というのはチベット〔人〕によって創作された体系である。他の者は、『パッダティ』は『現観莊嚴論』に結び付いており、世親の作であるという。『宝灯』などはバレー翻訳師などの作である<sup>63</sup>。

## [8. 結頌]

一生補処たる弥勒菩薩の教説と関連する大乘法の分類をよく説くことによって、兜率天に生まれ菩提が速やかに得られますように。

## [9. 奥書]

『聖弥勒と関連する教えが生じたあり方』(6a)、チョムデンレルティ著、完。

---

yang dag bstan || mam par byang ba bzhi yis ni || yongs su grub pa rab tu bsgrags || shes rab pha rol phyin par ni || sangs rgyas kyis ni gzhan bstan med ||.

<sup>61</sup> 「綱要書二部作」(sdom mam gnyis)とは『阿毘曇集論』と『撰大乘論』を指す。『デウ仏教史』(178頁)には次のようにある: sdom mam gnyis ni theg pa thun mong gi sdom mngon pa kun las btus pa dang | thung mong ma yin pa'i sdom theg pa bsdu pa'o || de yang mngon pa kun las btus pa [Inga: text] ni thun mong ma yin pa'i rang bzhin du bzhag cing | theg pa bsdu pa ni shes bya'i gnas la sogs bcus theg pa chen po mtha' dag gi don bsdu par brtsams so || 「綱要書二部作とは〔小大〕乗に共通な綱要書『阿毘曇集論』と〔小大〕乗に共通しない綱要書『撰大乘論』である。また、『阿毘曇集論』は不共の本性について規定し、『撰大乘論』は所知のあり方などの十項目によってあらゆる大乘の教義を要約して著された。」

<sup>62</sup> 「八部論書」や「弥勒と関連する二十法」については、袴谷 1982: 46-48 を参照。

<sup>63</sup> 『宝灯』は現存が確認されていないが、『仏教史・莊嚴陽光』所収大蔵経目録にはその名が言及される(47a6-7; Schaeffer and van der Kuijp 2009: cat. no. 29. 24-29. 26: nyi khri bzhung 'grel dang | skye med rin po che'i mdzod dang | bstan bcos rin chen sgron ma la sogs pa bod kyis rgya gar ba la kha 'phangs pa yod cing 『二万〔五千頌註〕パッダティ』や『不生宝蔵』や『宝灯論』など、チベット〔人〕が、インド人〔の著作権を〕非難したものがあ)。チョムデンレルティよりも時代が遅れるが『プトウン仏教史』目録部にも同書にかんする記述がみられる。『プトウン仏教史』、p. 232: 'dir bstan bcos ring chen sgron ma dang | nyi khri gzhung 'grel chung ba ni bod kyis byas pa'o zhes kha cig go ||。なおバレー翻訳師は *Prajñāpāramitākośatāla*(D 3806, P 5204)を訳している。

## 校訂テキスト

Phyi La 501

(1a1) byams pa dang 'brel ba'i chos kyi byung tshul bzhugs so ||

(1b1) 'phags pa byams pa la phyag 'tshal lo ||

[1. 弥勒法に言及する典拠]

byams pa dang 'brel ba'i chos rnams ji ltar (1b2) byung ba'i tshul ni | slob dpon **seng ge bzang pos brgyad stong 'grel pa** nas 'phags pa **thogs med** kysis zhus nas byams pa'i chos lnga mdzad (1b3) par bshad do || slob dpon **a bhya ka ra**'i *gnad kyi zla 'od* nas de ltar ma yin gyi bka' bsdu ba byas ma thag mdzad do || zhes bshad do ||

[2. 弥勒五法の思想]

de la<sup>64</sup> (2a1) *mngon rtogs brgyan* ni | lta ba dbu ma'i lugs kyi bden gnyis su gnas so || *mdo sde rgyan dang dbus mtha' dang chos nyid* gsum ni theg chen gyi (2a2) mdo mtha' dag gi dgongs 'grel lta ba ngo bo nyid gsum du gnas so || *rgyud bla ma ni de bzhin gshegs pa'i snying po'i mdo* la sogs pa theg chen gyi lta ba mthar thug pa ston pa ste | (2a3) lta ba de gnyis ka dang mi 'gal bar gnas so ||

[3. 弥勒四法にたいする註釈書者]

de dag mi yul du ni 'phags pa **thogs med** kysis gdan drangs nas slob dpon **dbyig gnyen** la bshad nas chos bzhi'i 'grel pa sku mched gnyis kysis<sup>65</sup> (2a4) mdzad do ||

[4. 『現觀莊嚴論』にたいする註釈書者]

[4.1. アールヤ・ヴィムクティセーナ]

*mngon rtogs brgyan* ni de gnyis kysis ma bkral bar gnas pa la | slob dpon **dbyig gnyen** gyi<sup>66</sup> slob ma bzhi'i ya gcig '**phags pa rnam grol sdes nyi khri le mang** le'u brgyad (2a5) du byas gong 'og 'khrugs pa rnams phal cher *mngon rtogs brgyan* dang mthun par bcos nas 'grel pa'ang de dang mthun par byas te mjug<sup>67</sup> tu mi yis<sup>68</sup> sngan chad ma myong ba zhes | 'phags (2b1) bzhi'i mngon rtogs su bshad pa'i 'grel pa mi yul du byung ba la snga bar bshad do ||

---

<sup>64</sup> de la] Ms; om. in K

<sup>65</sup> kysis] K (em.); kyi Ms

<sup>66</sup> gyi] K (em.); kyi Ms

<sup>67</sup> mjug] K (em.); 'jug Ms

<sup>68</sup> yis] K (em.) (= *Vrtti*); yi Ms

[4.2. バダンタ・ヴィムクティセーナ]

de nas **btsun pa grol sdes mngon rtogs brgyan** gyi dgos 'brel<sup>69</sup> dang sems bskyed kyi dbye ba dang dge<sub>(2b2)</sub> 'dun nyi shu dang | nges 'byed cha mthun gyi rgyas bshad dang | lam shes kyi gsham gyi tshig bcad gsum dang mkhyen gsum don bsdu dang | thar cha rgyas bshad dang rgya mthso che la chu bo bzhin la<sub>(2b3)</sub> sogs pa sho lo ka nyer gsum med pa<sup>70</sup> *mdo sde nyi khri le mangs*<sup>71</sup> dang sbyar ba'i bshad pa byas so ||

[4.3. ハリバドヲ]

de nas slob dpon **seng ge bzang pos** mdzad tshul ni | 'jam dpal zhal lung las | **dbus kyi yul chen kha bi ra**<sup>72</sup> grong khyer **rdo 'jog** tu | **seng ge bzang po** zhes byar grags pa rab thob pa'i | bla ma de ni mnyes byas lung thob gzhung mang thos || zhes 'byung ngo || de'i 'grel pa las **ma ga dha'i nā lendra** dang nye ba'i yul **kha bi ra**<sup>(2b4)</sup> grong khyer **rdo 'jog** gi phyogs gcig na gnas par bshad do || de la yul der rgyal po thams cad mi ma yin gyis bsad nas de re mos bya dgos pa gcig<sup>73</sup> byung ba na **gam ga'i lha mo** bsgrubs<sup>74</sup> pa'i ba lang rdzi<sub>(2b5)</sub> gcig gis mi ma yin de sod de | de rgyal por bkos pa la rgyal po<sup>75</sup> **go pa la** zhes zer ro || de'i btsun mo gcig<sup>76</sup> gis rgyal po dbang du bsdu pas<sup>77</sup> rdzas mtsho gcig tu 'pho<sup>78</sup> bas de'i klu dbang du 'dus te<sub>(3a1)</sub> de la klu'i bu byung ba la **shri dharma pa la** zhes zer ro || de gtsug lag khang rtsig par 'dod pa na klus mtsho bskams te der rtsig tu btsug<sup>79</sup> pa la<sub>(3a2)</sub> **tri ka tu ka**<sup>(3a4)</sup> 'i rgya mtsho sbas pa zhes zer ro || der *le brgyad ma bsdu don gyi 'grel pa* dang | *brgyad stong 'grel pa* dang | *'grel chung* dang gsum mdzad la | *bsdud pa* 'i *'grel pa*<sup>(3a3)</sup> **'bum phrag gsum pa** dang **rngog lo** kha 'phangs su 'dod de | *gnad kyi zla 'od* nas **seng bzang** gis byas so zhes bkod nas bkag snang ngo || **brgyad stong 'grel pa** las | **dpal ldan tri ka tu**<sub>(3a4)</sub> **ka**<sup>(3a4)</sup> 'i gtsug lag khang bzang der || sbyin las 'byor pa chen po thob pa rgyal po **dpal ldan chos skyong** ring la ni zhes bshad do || rgyal po 'di ni rgyal po **khri lde srong btsan** dang dus mnyam<sub>(3a5)</sub> pa yin no ||

[4.4. ジュニャーナパーダ]

de'i slob ma **lha sangs rgyas ye shes** zhes bya ba 'phags pa 'jam dpal gyi sprul pa'i dkyil 'khor du dbang bskur ba phyag rgya chen po mchog grub pa des *bsdud pa* 'i *'grel*<sub>(3b1)</sub> *pa* mdzad do ||

<sup>69</sup> 'gos 'brel] em.; 'gos 'grel Ms; dgongs 'grel K

<sup>70</sup> gsum med pa] em.; gsum | med pa Ms K

<sup>71</sup> mdo sde nyi khri le mangs] Ms; mdo sde le mangs K

<sup>72</sup> bi ra] Ms; bir K

<sup>73</sup> gcig (= 1)] Ms; zhig K

<sup>74</sup> bsgrubs] conj. (= 『現觀莊嚴論註分析』95.4); grub Ms K

<sup>75</sup> rgyal po] Ms; om. K

<sup>76</sup> gcig (= 1)] Ms; zhig K

<sup>77</sup> pas] conj.; pa'i Ms K

<sup>78</sup> 'pho] em.; pho Ms K

<sup>79</sup> btsug] Ms; bcug K

de ni **nā len dra**'i dge slong ma **yon tan bshes gnyen** zhes bya bas zhus nas byas pas<sup>80</sup> **gu ṅa mi tra** kho na'i ngor || dka' 'grel 'di ni 'dir byas so || bya ba dang | 'jam dpal<sub>(3b2)</sub> zhal lung las | de la mnam dpyad rig 'byung shrī<sup>81</sup> **nā lendar** || **yon tan bshes gnyen** zhes bya rig ldan de yi ngor | blun blos rab tu byed<sup>82</sup> pa'i phyogs 'ga' rtsom pa'ang byas zhes bshad<sub>(3b3)</sub> pa yin no || des na 'di brgyud<sup>83</sup> pa'i nang du 'grang pa<sup>84</sup> ni nor pa yin no || slob dpon de la slob ma paṅ grub 'dres pa bco brgyad byung bar zhal lung gi 'grel pa las bshad do ||

[4.4. ラトナーカラシャーンテイ]

de nas<sub>(3b4)</sub> **bi kra ma shi**<sup>85</sup> **la**'i shar phyogs kyi sgo srung pa slob dpon **shanti pas nyi khri**'i 'grel pa dag ldan dang | brgyad stong pa'i 'grel pa snying po mchog dang | shes rab pha rol phyin pa'i man ngag dang<sub>(3b5)</sub> gsum mdzad do || de la rgyal po **dharma pā la**'i sras **de ba pā**<sup>86</sup> **la** ni grub thob **la ba pas** bsam bzhin du skye ba blangs pa ste | des **bi kra ma**'i lha khang brtsigs | **sangs rgyas ye shes zhabs** la dbang<sub>(4a1)</sub> bskur zhus so || slob dpon **shanti pa**'i dus na rgyal po **mahā pā la** zhes pa yod do ||

[4.5. アバヤーカラグプタ]

de nas slob dpon **a bhya ka ras** brgyad stong 'grel pa gnad kyi zla 'od dang |<sub>(4a2)</sub> mngon rtogs rgyan gyi don yongs su rdzogs par ston pa thub pa dgongs pa'i rgyan gnyis mdzad do ||

[4.6. その他の註釈]

de dag ni mdo'i don mngon rtogs rgyan dang mthun par 'chad pa'i 'grel pa yin la | 'grel<sub>(4a3)</sub> chung la ni slob dpon **chos kyi bshes gnyen** dang | **rigs kyi byin pa** dang | **rin chen grags pa** dang | **shes rab 'byung gnas blo gros** dang | **ku ma ra shrī**<sup>87</sup> lnga'i 'grel bshad yod do ||

[5. 八現観について解説しない註釈]

da ni mngon<sub>(4a4)</sub> rtogs su mi 'chad pa'i 'grel pa bshad de | de la dbu ma'i bstan bcos nmams kyang mdo'i don stong nyid bshad pas mdo'i don 'grel yin no || 'phags pa **thogs med** kyis *de nyid rnam nges* shes bya<sub>(4a5)</sub> ba mkhyen gsum yan chad kyi mdo 'chad pa'i 'grel pa byas par bshad la | slob dpon **dbyig gnyen** gyi *gzhung gi 'grel pa* zhes bya ba sgo gsum dang 'brel<sup>88</sup> pa

<sup>80</sup> byas pas] Ms; om. in K

<sup>81</sup> shrī] em.; shi len Ms; shi K

<sup>82</sup> byed] Ms; byas K

<sup>83</sup> brgyud] Ms; rgyud K

<sup>84</sup> 'grangs pa] Ms; bgrang ba

<sup>85</sup> shi] Ms; shrī K

<sup>86</sup> pā] K (em.); pa Ms

<sup>87</sup> ku ma ra shrī] Ms; ku mā ra shrī K

<sup>88</sup> 'brel] em.; 'grel Ms K

zhes bya ba sgo gsum dang mnam<sup>(4b1)</sup> grangs bcu gcig tu 'chad pa byas so || de'i slob ma slob dpon **phyogs glang** gis don sum cu rtsa gnyis su ston pa *brgya stong don bsdus* dang | de'i 'grel pa slob dpon **dkon mchog 'bangs** kyis mdzad do || slob dpon **mche**<sup>(4b2)</sup> **ba'i sdes** kyang slob dpon **dbyig gnyen** ltar 'chad pa de bas ches mang pa gcig mdzad de yams nad 'di mams zad nas ni zhes bya ba man chad kyī mdo'i 'grel pa ma 'gyur bar snang ngo || slob dpon **ka ma la**<sup>(4b3)</sup> **shi**<sup>89</sup> **la** dang **bi ma la mi tra** dang **dze tā ri** gsum gyis *sher snying gi* 'grel pa mdzad la | slob dpon **kām**<sup>90</sup> **pa la ste la ba'i na bza' can** gyis *sher phyin gyi don bsdus pa'i tshigs bcad dgu pa*<sup>(4b4)</sup> dang *sher phyin sgom pa'i man ngag* gnyis mdzad cing | slob spon **legs ldan rnam snang** gis<sup>91</sup> *sher phyin gyi pin dar tha* mdzad do ||

[6. 『現觀莊嚴論』諸註釈についてのまとめ]

de la mngon rtogs brgyad du bshad pa'i 'grel tig mams kyis rgyas<sup>(4b5)</sup> 'bring bsdus gsum dang | *khri brgyad stong pa dang sdud pa'i tshig bcad* lnga 'phags bzhi'i mngon rtogs su bshad do || mngon rtogs su mi 'chad pa'i 'grel pa mams kyī rang rang gi mdo mams tshul<sup>(5a1)</sup> gzhan gyi sgo nas 'chad do || *brgyad stong don bsdus* ni mngon par rtogs pa'i rim pa ston pa'i mdo dang snying po'i don ston pa'i mdo sras yum nyi shu thams cad<sup>(5a2)</sup> 'chad par nus te | sum cu rtsa gnyis kyis ma bsdus pa'i don ni de dag na med pa'i phyr ro || des na de ni mdo'i 'grel pa gcig<sup>92</sup> la nus pa che ba yin no ||

[7. 無着、世親、ディグナーガと三性説]

yang **thogs**<sup>93</sup> **med** sku mched dang **phyogs glang**<sup>(5a3)</sup> gis<sup>94</sup> ngo bo nyid gsum du bshad de | 'phags pa **byams pas** sangs rgyas la sher phyin gyi don zhus pas ngo bo nyid gsum gyi sgo nas de'i don gsungs pa'i rjes su 'brang ba yin no || *don bsdus* las | shes<sup>(5a4)</sup> rab pha rol phyin pa ni | bstan pa gsum la yang dag rten<sup>95</sup> || bya ba dang | sangs rgyas kyis ni gzhan bstan med ces bshad pa bzhin no || 'grel tig gzhan mams ni lta ba dbu mar 'chad<sup>(5a5)</sup> pa mang la | **shanti pa** la<sup>96</sup> sogs pas | ngo bo nyid gsum gyi sgo nas bshad pa'ang<sup>97</sup> ci rigs pa snang ngo || *sa'i dngos gzhi bcu bdun* dang | *rnam par gtan la dbab pa bsdu ba* dang | *gzhi bsdu ba* dang<sup>(5b1)</sup> *rnam grangs bsdu ba* dang | *rnam par bshad pa'i sgo bsdu ba* lnga dang | *sdom rnam gnyis* ni **byams pas** bshad nas **thogs med** kyis bsdus par mkhas pa mams kyis bshad la | des byas<sup>(5b2)</sup>

<sup>89</sup> shi] Ms; shī K

<sup>90</sup> kām] Ms; kā ma K.

<sup>91</sup> gis] em.; gi Ms K

<sup>92</sup> gcig (= 1)] MS; zhig K

<sup>93</sup> thogs] MS; thog K

<sup>94</sup> gis] K (em.); gi Ms

<sup>95</sup> rten] Ms; bsten K

<sup>96</sup> la] K (em.); las Ms

<sup>97</sup> pa'ang] Ms; pa K

pa'i dgongs 'grel gyi 'grel pa dang | **dbyig gnyen** gyis byas pa'i sa bcu pa'i 'grel pa dang |  
rang bzhin gsum bstan pa la sogs pa **thogs med** mched kyis mdzad pa mang po snang <sup>(5b3)</sup> bas  
pra ka ra na sde brgyad dang | **byams pa** dang 'brel ba'i chos nyi shu ni bod kyis byas pa'i  
mnam gzahag yin no || gzhan gzhung 'grel mngon rtogs brgyan dang sbyar ba **dbyig gnyen** <sup>(5b4)</sup>  
gyis byas zer ba dang | rin chen sgron ma la sogs pa ni **ba reg lo tsa ba** la sogs pas byas pa yin  
no ||

[8. 結頌]

skye ba gcig na mngon par 'tshang rgya ba ||  
rgyal sras byams pa'i gsung rab dang <sup>(5b5)</sup> 'brel ba'i ||  
theg chen chos kyi mnam dbye legs bshad pas ||  
dga' ldan skyes nas byang chub myur thob shog ||

[9. 奥書]

'phags pa byams pa dang 'brel ba'i chos kyi byung tshul **bcom** <sup>(6a1)</sup> **ldan ral gris** sbyar ba rdzogs  
so ||<sup>98</sup>

## 参考文献

### 一次資料

- AA *Abhisamayālaṃkāra*. 梵蔵テキストは兵藤 2000 所収。  
Ālokā *Abhisamayālaṃkāralokā*  
*Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāvyaḥkhyā* by Haribhadra. Skt.  
ed. Wogihara, Unrai. Tokyo: The Toyo Bunko,  
1932–1935; Tib. D 3791, P 5189.  
Piṇḍārtha *Āryaprajñāpāramitāpiṇḍārtha* by Dignāga. Skt. ed. Tucci,  
Giuseppe, *Journal of the Royal Asiatic Society of Great  
Britain and Ireland*, 1947, pp. 53–75; Frauwallner, Erich,  
*Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens* 3,  
1959, pp. 140–4; Tib. D 3809, P 5207; 大正蔵 No. 1518  
『仏母般若波羅蜜多円集要義論』.

<sup>98</sup> 末尾に同写本を校正したことを示す一文(gcig zhus dag)が付記される。

K	Kamtrul Sonam Dondrub による『弥勒五法の歴史』活字本。下記『弥勒五法の歴史』の項参照。
<i>Mañjuśrīmūlakalpa</i>	<i>Ārya-Mañjuśrīmūlakalpa</i> . Skt ed. Vaidya, Paraśurāma Lakshmaṇa, Buddhist Sanskrit Text, No. 17–18, 2 Vols., Darbhanga, 1961–1964; Tib. D 543, P 162.
<i>Marmakaumudī</i>	<i>Marmakaumudī Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāvṛtti</i> by Abhayākaragupta. Tib. D 3805, P 5202.
<i>Mukhāgama</i>	<i>Dvikramatattvabhāvanānāma Mukhāgama</i> by Buddhaśrījñāna. D 1853, P 2716.
<i>Mukhāgamavṛtti</i>	<i>Sukusumānāma Dvikramatattvabhāvanāmukhāgamavṛtti</i> by Vitapāda. D 1866, P 2729.
MS	『弥勒五法の歴史』写本原本。下記『弥勒五法の歴史』の項参照。
<i>Sañcayagāthāpañjikā</i>	<i>Sañcayagāthāpañjikā</i> by Buddhaśrījñāna. D 3798, P 5196.
<i>Vivṛti</i>	<i>Abhisamayālaṃkārikāsāstravivṛti</i> by Haribhadra. Skt. ed. Koei H. Amano, Kyoto: Heirakujishoten, 2000; Tib. D 3793, P 5191.
<i>Vṛtti</i>	<i>Āryapañcaviṃśatisāhasrikāprajñāpāramitopadeśasāstra Abhisamayālaṃkāravṛtti</i> by Ārya-Vimuktisena. Tib. D 3787, P 5185.
『黄金鬘』	Tsong kha pa Blo bzang grags pa, <i>Shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa 'i rgyan 'grel pa dang bcas pa 'i rgya cher bshad pa 'i legs bshad gser phreng</i> . mTsho mngon mi rigs dpe skrun khang, 1986.
『カダム全集』(第1輯)	<i>bKa'gdams gsung 'bum 'phyogs sgrig thengs dang po</i> . Ed. dPal brtsegs bod yig dpe mnying zhib 'jug khang. Vol. 1-30. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2006.
『カダム全集』(第2輯)	<i>bKa'gdams gsung 'bum 'phyogs sgrig thengs gnyis pa</i> . Ed. dPal brtsegs bod yig dpe mnying zhib 'jug khang. Vol. 31-60. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2007.
『カダム全集目録』(第2輯)	<i>bKa'gdams gsung 'bum 'phyogs sgrig thengs gnyis pa 'i dkar chag</i> . Ed. dPal brtsegs bod yig dpe mnying zhib 'jug

- khang. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2007.
- 『現觀莊嚴論註分析』 Ar Byang chub ye shes, *mNgon rtogs rgyan gyi 'grel pa rnam par 'byed pa*. 『カダム全集』(第1輯), Vol. 2, 91–447.
- 『十万頌般若莊嚴華』 bCom ldan ral gri, *rGyal ba'i yum stong phrag brgya pa rgyan gyi me tog*. 『カダム全集』(第2輯), Vol. 52, 41–69 (同写本を底本とした活字版は『リクレル全集』, Vol. 5, 565–617 [Ca 9]所収).
- 『デウ仏教史』 mKhas pa lde'u, *lDe'u chos 'byung rgyas pa*. Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 1987.
- 『仏教史・莊嚴陽光』 bCom ldan ral gri, *bsTan pa rgyas pa rgyan gyi nyi 'od*. 『カダム全集』(第2輯), Vol. 51, 53–156 (同写本を底本とした活字版は『リクレル全集』, Vol. 1, 96–257 [Ka 4]所収).
- 『プトゥン仏教史』 Bu ston Rin chen grub, *bDe bar gshegs pa'i bstan ba'i gsal byed chos kyi 'byung gnas gsung rab rin po che'i mdzod*. Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 1988.
- 『宝性論要義』 rNgog lo tsā ba Blo ldan shes rab, *Theg pa chen po rgyud bla ma'i don bsdu pa*. A: Dharamsala, 1993 ≈ NGMPP, Reel No. L 519/4 ≈ 東北蔵外 no. 6798; B: 『カダム全集』(第1輯), Vol. 1, 289–367.
- 『弥勒法の歴史』 bCom ldan ral gri, *Byams pa dang 'brel ba'i chos kyi byung tshul*, 『カダム全集』(第2輯), Vol. 53, 157–167 [略号 MS] (同写本を底本とした活字版は『リクレル全集』, Vol. 5, 43–56 [Ca 2]所収 [略号 K]).
- 『ロントゥン小作品集』 Rong ston Shes bya kun rig, *gSung thor bu*. Dharamsala, 1999.
- 『リクレル全集』 bCom ldan ral gri, *bCom ldan rigs pa'i ral gri'i gsung 'bum*. Ed. Kamtrul Sonam Dondrub. 10 Vols. Trace Foundation/TBRC. Lhasa, 2006.
- 『リクレル著作目録』 bCom ldan ral gri, *Śākya'i bstan pa la rang gis bstan bcos ji ltar brtsams pa'i tshul*. 『カダム全集』(第2輯), Vol. 51, 37–51 (同写本を底本とした活字版は『リクレル全集』, Vol. 1, 29–44 [Ka 2]所収).

『チベット梵文貝葉目録』 “Tibbat meṃ upalabdha bauddha evaṃ bauddhetara saṃskṛta pāṇḍulipiyoṃ kā sūcī,” *Dhīḥ* 41, 2006, pp. 159–182.

## 二次資料

Burchardi, Anne

2006 A Provisional List of Tibetan Commentaries on the *Ratnagotravibhāga*. *The Tibet Journal* 31-4, 1–46.

Dotson, Brandon

2007 “Emperor” Mu rug btsan and the *'Phang thang ma Catalogue*. *Journal of the International Association of Tibetan Studies*, Issue 3. 1–25.

Huntington, Susan L.

1984 *The Pāla-Sena School of Sculpture*. Leiden: Brill.

Jiang, Zhongxin

2000 A Sanskrit Fragment of the *Prajñāpāramitāratnaguṇasamcayagāthā-vyākhyā* of Haribhadra: A Romanized Text. *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University*, 115–123.

Kano, Kazuo

2006 *rNgog Blo-Idan-shes-rab's Summary of the Ratnagotravibhāga: The First Tibetan Commentary on a Crucial Source for the Buddha-nature Doctrine*. Dissertation Thesis submitted to Hamburg University.

Kramer, Ralf

2007 *The Great Tibetan Translator: Life and Works of rNgog Blo Idan shes rab (1059–1109)*. München: Indus Verlag.

Khang dkar Tshul khriṃs skal bzang

1984 *Byams chos bskyar źib dran'ies mdzes rgyan skyabs rje yoñs 'dzin khri byang rin po che'i bka'drin dran gso : A synthetic study of the treatises of Maitreyañātha written in memory of the late Yoñs-'dzin Khri-byañ Rin-po-che*. New Delhi: Western Tibetan Cultural Association.

Pandey, J.

1997 *Bauddhalaghugrantha Samgraha: A Collection of Minor Buddhist Texts*. Central Institute of Higher Tibetan Studies. Varanasi.

Schaeffer, Kurtis. and van der Kuijp, Leonard.W.J.

2009 *An Early Tibetan Survey of Buddhist Literature: The bsTan pa rgyas pa*

*rgyan gyi nyi 'od of bCom ldan ral gri*. The Harvard Oriental Series, vol. 64. Cambridge, Massachusetts, London: Harvard University Press.

Tucci, Giuseppe.

1956 *Minor Buddhist texts*. Pt. 1–2. Serie orientale Roma 9. Roma: IsMEO.

磯田 熙文

1996 『『十万般若広注』と『三母広注』』、『勝呂信静博士古稀記念論文集』、山喜房仏書林、17–29。

1997 「三母と Abhisamayālamkāra」、『印度学印度学仏教学研究』91 (46-1)、156–161。

加納 和雄

2007 「ゴク・ロデンシェーラブ著『書簡・甘露の滴』—校訂テキストと内容概観—」、『密教文化研究所紀要』20、1–58。

2009 「ゴク・ロデンシェーラブ著『書簡・甘露の滴』—訳注篇—」、『密教文化研究所紀要』22、121–178。

谷口 富士夫

2002 『現観体験の研究』、山喜房佛書林。

袴谷 憲昭

1982 「瑜伽行派の文献」、『講座大乘仏教 8 唯識思想』、春秋社、53–58。

1986 「チベットにおけるマイトレーヤの五法の軌跡」、『チベットの仏教と社会』、春秋社、235–268。

兵藤 一夫

1984 「Bstan hgyur 所収の『二万五千頌般若』についての二・三の問題—特に『現観莊嚴論』との関連において—」、『日本西藏学会会報』30、7–12。

2000 『現観莊嚴論の研究・般若経釈』、文栄堂書店。

加納和雄

高野山大学文学部助教

*Assistant Professor, Koyasan University, Koyasan, Japan*

中村法道

京都大学大学院文学研究科仏教学専修博士課程

*Graduate Student, Graduate School of Letters, Kyoto University, Kyoto, Japan*